

## 「花泥棒の記」の頃―流通情報学部で過ごした日々―

和田 律子

一九九九年四月、私は流通経済大学に、一般教養担当（日本文学・現代文章論）教員として着任し、流通情報学部所属となりました。それまで専任職を持たずにいた私にとり、流通経済大学は、大学教員としての第一歩を踏み出した場でありました。そして、大学での仕事の実際を経験する、初めてだらけの日々が流通情報学部で始まりました。当時の流通情報学部が、開設されてまもない清新な気概に溢れた新学部で、「流通情報」の命名も、学長はじめ諸方面の期待が込められたものであることも、最初はよく理解できませんでしたが、学部にも所属し、学部の先生方の学部にたいする様々な理想を、折に触れて拝聴するうちに、次第に共感を覚えるようになっていきました。

流通情報学部の先生方は、当時はほとんどが六号館に研究室をお持ちでした。私は、二号館に研究室がありましたので、教授会や学部の会議、個々の先生方との連絡など、頻繁に、二号館と六号館を往復していまし

た。いまは、二号館は新築中で、当時の面影は薄れつつありますが、二号館の後ろには広い中庭があり、季節ごとに美しい自然が楽しめます。とくに、二号館一階にあった印刷室は中庭に面していて、きちんと手入れされているけれど、きつちりと管理されているという程でもなく、ゆったりと自然が守られている中庭を、授業の準備の暇々に眺めるのが、慣れない生活に緊張していた私にとり、束の間の安らぎとなっていました。そして、様々な迷いや悩みが生じるたびにご相談に伺う六号館の先生方の研究室からは、その中庭を真横から眺めることができました。二号館とはまた違った趣きの風景が広がる六号館で、先生方にご助言をいただくながら、風景にも力づけられる日々がありました。

ある日、いつものように印刷室で仕事をしながら中庭を眺めていたとき、草原のなかに、ぼつぼつとピンクの花が咲いているのに気づきました。そして、数日後には、広い中庭一面に、ピンクの花の群生が出現し

ました。振花（ネジバナ）でした。振花は、蘭の仲間としては、花が極めて小さいこと、花は穂をくるくるとねじれながら咲き登り、ねじれ方がまちまちであること、ひとつひとつの花がそれぞれに少しずつ異なる姿をしていること等を、以前どこかで聞いたことがありましたが、こんなにみごとな群生に出会ったのは初めてでした。

ちょうどその頃、大学報「つくばね」（現在の「RKU Today」の前身）に自己紹介を兼ねて小文を書くようにとの依頼があり、考えた末に書いたのが、「花泥棒の記」という、この中庭の振花にまつわる、とても恥ずかしい顛末を記したものでした。二号館中庭の振花の群生に息を飲んだこと。あるとき、一株もらおうと手で引く張ったら、華奢な草なのに案外根が深く張っていて、悪戦苦闘、ふと顔を上げると、流通信報学部の某先生が笑いながら立っていらして、花の名をお尋ねになったこと。恥ずかしかったこと。でも、それがきっかけで花談義が弾み、植物の話題をとおして、次第に他の先生方とも親しくなっていくたこと、などの内容でした。そして、その後、拙文をお読みくださった方々から、振花なんて珍しいのですか、家の庭にたくさんあるから持ってきてあげましょうか、私も振花が好きですよ、などと声をかけていただいたり、徐々にも馴染み、大学の一員である自覚も生まれていきました。

あれから二十年近い歳月が流れました。そして、お世話になった流通信報学部から離れて、ずいぶん長い時間が経ちました。しかし、何かの折に、流通信報学部に関する話題を偶然耳にしたりすると、在籍していたころのことを思い出し、ふと懐かしい気持ちがおこり、知らず知らずのうちにその話題に耳を澄ませている自分に気づくときがあります。

着任後間もなく、身に余る重い仕事を任され、途方に暮れたこと。ようやく仕事を終えて、ほっとした帰り道、偶然、出会った坂下昇学部長

が、駅までマイカー（「おんぼろワゴン」とおっしゃっていました）で送ってくださったこと。その車中で、「オナバケ」という珍しい標識を見つけた土地不案内の私に、「女が化けると書くのですよ。伝説があつてね」と不思議な伝説のあらましを話してくださいました。筑波山もよい風景だから、ぜひ行ってごらんさいと、行き方を説明してくださいましたこと。今思えば、不慣れな仕事に右往左往している私を気遣っていただくのでしょう。「女化街道」を通るたびに、坂下学部長のご温情を思い出します。

また、当時、学部では、水野恵子先生を中心に、留学生のスピーチコンテストが開かれていました。審査員の一人として末席に連なって留学生の話聞いていましたが、留学生たちが、宿舎のお風呂が共同風呂で、本国では経験したことがなかったこと、びっくりしたけれど、慣れるとみんなと一緒にいるお風呂が楽しいことなどを、戸惑いとともに口々に語るのを聞き、温泉や銭湯の文化に馴染んだ者として、逆に驚かされたこともありました。文化の異なる地からやってきた学生たちと交流するむずかしさと楽しさを、スピーチコンテストが教えてくれました。

さらに、学生たちに、なるべく多くの教員と接する機会を提供するためには何ができるか、をめぐって、熱い議論が交わされたこともありました。試行錯誤の結果、一年基礎ゼミを複数の教員がグループを担当（オムニバス形式）するという新形式を敢行することになりましたが、その実現への過程をとおして、先生方の研究教育に対する理想や真摯なご姿勢に接し、学生への向き合い方を考えることができました。

そして、こんなこともありました。学部完成年次を迎えた記念に、海外旅行に行こうという話題が出ました。途中から着任して、新学部創設の苦勞も知らない私にまで、大丈夫、一緒に連れて行ってあげるからと、心優しい気遣いをいただきました。結局、このすてきな計画は、夢に終

わり・・・、みんなで箱根に行きました・・・。それでも十分に和やかで楽しい旅でした。

などなど。書いていると、いろいろな思い出が、当時の先生方のお声やお顔とともに、次々に甦ります。流通情報学部は、私にとり、大学における原郷ともいべき場所でした。

さて、「花泥棒」の成果である一株の振花は、今では拙宅の小さな庭の片隅に根付き、こぼれ種から芽生えたものもあり、初夏にはピンクの花を思い思いの向きに咲かせてくれています。右に左にねじれて花開く可憐な花を見るたびに、「花泥棒」の頃の、学部の未来を語り、あるべき姿を模索し、新学部に入學してきた学生たちのひとりひとりに大切に向き合い、彼らに期待を寄せる、先生方の清新で真剣なまなざしが重なります。中庭の振花のみごとな群生は、もう見ることができないかもしれません。しつかりと根を張って咲いている庭の振花に、個を大切に育て、さまざまな個の集成として花開かせ、伝統を作り上げてきた流通情報学部の、ますます存在感を増していく姿を重ねてみたいと思います。そして、これからも、晴れた筑波を仰ぎ、夕焼けに浮かぶ富士を望みつつ、「流通情報学部」の話題に、私は耳を澄ませていくことでしょう。